

人との出会いを大切に

五十年もの長い間、曲がりなりにも教育に携わることができたのは、先輩・同僚・生徒たちと、たくさんの素晴らしい出会いに恵まれたからであると思っている。

生徒については、私の成長に合わせ、学校を転任するごとに優秀な生徒に出会い、「こんな優秀な子供たちを教えることができなかつたら教師ではない。」といつも思っていた。

九人兄弟の中で揉まれて育ったからか、同僚とは、教師としての競争をしながらも仲良くできたし、先輩など年長者には、自然と礼儀正しく、素直に大事にできたと思っている。おかげで、身内のような温かい指導をいただき、人間として大切なこと、教員人生で重要なことなど、本当に多くのことを教えていただいたと思っている。

「人生は正に邂逅の連続であり、人生の多くは邂逅が決定する。邂逅で一步踏み出すかどうかは天命である。」は、五十歳を過ぎて知った言葉である。寂しがり屋のため、人との出会いを大切にしてきたことは事実であるが、天命とは知らずに、自分の意識や都合でまったく計り得ないその時々タイミングの中で、人を信じ一步一步踏み出してきた。仏教でいう[如是]（によぜ仏を離れては考えられないこと）の世界だったのかもしれない。一步踏み出すごとに、遣り甲斐のある新しい世界が開けていった。

人は一人では生きていけない。人は人の間、人との交わりの中でこそ成長していく。小さい時に骨肉腫を患い、死ぬか生きるかの大手術を三回も経験したという私の尊敬する先輩から、「生きている喜びというのは、命を留めたことではなく、麻酔がさめた時、生きていることを手を握って喜んでくれる者がいることだ。」と聞いたことがある。

自分の人生を振り返ったとき、「少なくとも自分から、友人や先輩を裏切ったり、離れたりしたことはなかった。」「手を握ってあげたいと思ってきた。」ことが、自慢と言えるかもしれない。